様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ５ 月 ３１ 日現在

機関番号：１２１０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2015
課題番号：２５３７０８４９

研究課題名（和文）フランコ政権とスペイン西北アフリカ帝国の崩壊

研究課題名（英文）Francoist regime and the fall of the Spanish northwestern African Empire

研究代表者
深澤　安博（FUKASAWA, Yasuhiro）

茨城大学・人文学部・名誉教授

研究者番号：６０１３６８９３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,900,000円

研究成果の概要（和文）：　第2次世界大戦中のフランコ政権のアフリカ植民地政策の策定とその実際、これに対する「現地」の「原住民」の反応とくにスペイン領モロッコの民族主義者の要求、スペインによるタンジャ（タンジール）占領の意図と結果、モロッコの民族主義者と連合軍・連合国との接触、連合軍・連合国の北アフリカ政策に対するフランコ政権の反応、以上のことを解明した。総じて、スペイン西北アフリカ帝国（構想）は第2次世界大戦中のドイツによるヨーロッパとくにフランス占領によって可能となったこと、しかし、第2次世界大戦末期になるとその地域的・国際的条件は消え失せたことを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：The investigation during three years(2013-2015) has clarified or verified the following issues: the colonial policy of Francoist regime in northwestern Africa during the Second World War; the reaction of the ‘natives', above all Moroccan nationalists to this policy; the intention and the result of the occupation of Tangier by Francoist regime; the relation between Moroccan nationalists and the Allied Forces/Nations; the reaction of Francoist regime to the presence or the policy of the Allied Forces/Nations in northwestern Africa. In general, in the first stage of the Second World War, the idea of the Spanish northwestern African Empire had some posibilities owing to the German occupation of Europe, above all of France, but in the final phase of the War, the regional or international circumstances didn't permit such Francoist dream any more.

研究分野：人文学

キーワード：フランコ政権　西北アフリカ帝国構想　スペイン領モロッコ　モロッコ民族主義者　タンジャ占領　ドイツによるフランス占領　連合国とモロッコ民族主義者　連合国とフランコ政権

１．研究開始当初の背景

（1）1920 世紀スペインのモロッコでの「18 年戦争」（1909～1927 年）はその後のスペイン政治・社会に決定的とも言える衝撃を与えた。この植民地戦争においてスペインが獲得したモロッコ植民地は 1936 年に始まったスペイン内戦においてもやはり決定的意味を持った。以上のことについては、本研究の研究代表者がここ数年間の論文・著書で明らかにしてきた。

（2）1939 年 3 月に内戦に勝利したフランコ政権は、第 2 次世界大戦が始まり、とくにドイツ「第 3 帝国」が事実上フランスを支配すると、フランスのアフリカ植民地支配の後退を見て、「スペイン西北アフリカ帝国」建設の意図を顕わにする。フランコ政権のスペイン西北アフリカ帝国構想はタンジャ（タンジール）の占領やフランス領モロッコまたアルジェリア西部の割譲要求に典型的に表れた。フランコ政権は以上の要求を枢軸側への参戦の条件とするまでになった。

（3）この研究テーマについては、モラーレス・レスカーノ(Víctor MORALES LEZCANO)の先駆的研究がある(*España y el Norte de Africa:El Protectorado en Marruecos (1912-1956)*(1986);*El final del Protectorado hispano-francés en Marruecos* (1998))。さらに以下の研究も参考となった。María DOLORES ALGORA WEBER, *Las relaciones hispano-árabes durante el regimen de Franco*(1995); María Concepción YBARRA ENRÍQUE DE LA ORDEN, *España y la descolonización del Magreb*(1998); Gustau NERÍN/Alfred BOSCH, *El imperio que nunca existió. La aventura colonial discutida en Hendaya*(2001).研究代表者自身も今までの研究に基づいた自らの見解を以下で公にしていた。Yasuhiro FUKASAWA, ‘ El nuevo encuentro hispano-marroquí en el siglo XX:¿‘Moros amigos ’y/o‘ Moros malos ’? ’, Grupo de Materiales Impresos/ Hirotaka Tateishi(eds.),*Percepciones y representaciones del Otro: España-Magreb-Asia en los siglos XIX y XX* (2006);Yasuhiro FUKASAWA, ‘ Moroccan and Pan-Arab Nationalists during the Spanish Civil War,1936-1939’, *The Izura Bulletin*(Ibaraki University) , 18(2012).

（4）以上の研究状況の中で、フランコ政権のスペイン西北アフリカ帝国構想は第 2 次世界大戦の展開の中でどこまで実現し、どのような推移をたどったのかということの重要性に気づいた。さらに、以下のことを解明することの重要な意味に気づいた。この帝国構想はヨーロッパでの戦争の推移とどのように関連していたのか、フランコ政権は実際にどのような植民地政策とくに「原住民」統治をおこなったのか、第 2 次世界大戦末期に枢軸諸国が後退すると、フランコ政権の北アフリカ政策はどのような転変を見るのか。

２．研究の目的

（1）スペイン内戦に勝利した後の第 2 次世界大戦中のフランコ政権のアフリカ植民地政策を明らかにする。さらに、1940 年 10 月のヒトラー・フランコ会談でフランコ政権側は北アフリカのフランス領についてどのような要求をしたのか、この時期にスペイン西北アフリカ帝国建設の意図を公にした代表的文献『スペインは要求する』（José María AREILZA/ Fernando María CASTIELLA, *Reivindicaciones de España*(1941)）の内容も考察する。

（2）上記の期間にスペインのアフリカ植民地の中軸を成したモロッコ保護領ではどのような植民地統治政策が展開されたのか、とくにどのような「原住民」統治政策がおこなわれたのかを解明する。

（3）枢軸諸国の崩壊と第 2 次世界大戦の終了に伴って、フランコ政権がどのようにしてアフリカ植民地を放棄せざるをえなくなったのかを解明する。その際、とくに連合軍・連合国の北アフリカ政策、連合軍・連合国とモロッコ民族主義者との関係にも注目する。

以上の解明にあたっては、スペインの「原住民」統治政策に対してモロッコ民族主義者また部族地域の「原住民」がどのような対応を見せたかにも注目する。

３．研究の方法

（1）スペイン陸軍資料館（マドリード）に所蔵されているアフリカ植民地統治政策関係文書を閲覧した。陸軍資料館に付設されている図書室の資料も閲覧した。

（2）スペイン総合公文書館（マドリード県アルカラ・デ・エナーレス）に所蔵されているアフリカ植民地統治政策関係文書を閲覧した。とくに第二次世界大戦中(1939～1945年)からモロッコが独立した1956年までの文書を集中的に閲覧した。

（3）スペイン軍およびアフリカのスペイン植民地当局の資料が所蔵されているスペイン国立図書館（旧）アフリカ資料室の文書を閲覧した。

（4）スペイン陸軍資料館図書室、スペイン国立図書館新聞雑誌室、マドリード市立新聞資料館に所蔵されている『モロッコにおけるスペイン保護領官報』（*Boletín Oficial de la Zona del Protectorado Español en Marruecos*）、アフリカ植民地関係の雑誌・新聞（とくにメリーリャで発行されていた『リーフ通信』 *El Telegrama del Rif* ）、アフリカ派軍人たちが発行していた雑誌（とくに『アフリカ』 *Africa*.以前の『植民地軍雑誌』*Revista de Tropas Colonilaes*が名称変更して 1942 年に再刊）、フランコ政権下でアフリカ研究所が発行していた雑誌（*Archivos del Instituto de Estudios Africanos*）、当時公刊されたモロッコ植民地関係書籍を閲覧し

た。
（5）国内で関係文献が所蔵されている国立国会図書館、東京外国語大学図書館の資料を閲覧した。
（6）関連テーマを研究しているスペイン陸軍資料館研究員と研究打ち合わせをおこなった。
（7）フランコ政権とスペイン西北アフリカ帝国に関するスペイン語・フランス語・英語・ドイツ語で公刊された最近の研究成果を摂取した。

４．研究成果

（1）ヨーロッパで第 2 次世界大戦が始まると、フランコ政権はドイツ「第 3 帝国」のヨーロッパ支配とくにドイツのフランス侵入を予期して、外務省内で「スペイン西北アフリカ帝国」構想を練り上げた。とくにまずはタンジャの占領を立案した。実際に、ドイツが軍事的に優勢だった 1941 年前半頃までは、フランコ政権はフランス領モロッコやアルジェリア西部を占領して「スペイン西北アフリカ帝国」構想を実現しようとの意図を持っていた。1940 年 6 月のタンジャ占領はこのような意図のもとに遂行された。同年 10 月のヘンダーヤでのフランコ・ヒトラー会談で、フランコは上述のような北アフリカのフランス領の割譲を求めたが、ドイツ側はかならずしもこれに同意しなかった。第 2 次世界大戦初期のフランコ政権の対外政策はこの西北アフリカ帝国建設をめぐって展開されたと言ってもよい。
（2）フランコ政権は、内戦中に自らに協力したモロッコ民族主義者を公的には宥和する政策（民族主義政党の承認、内戦に参加したモロッコ人兵士への年金、ハブー（ワクフ）のモロッコ人による管理、新聞・結社の自由など）を展開した。モロッコ民族主義者の一部にはフランスによる統治よりもスペインによる統治を期待する動きも見られた。しかし実際には、民族主義者を厳しく監視し、また 2 つの民族主義政党を相互に対立させて民族主義運動の分裂を図った。さらに、身分証明書の発行・所持を強制するなど「原住民」は厳しく監視された。また、農産・畜産税などの徴税は強化された。
（3）ドイツが次第にヨーロッパで軍事的に不利な状況となった 1942～1943 年になると、フランコ政権は北アフリカのフランス領を割譲させての西北アフリカ帝国建設を強く主張できなくなった。これを受けて、モロッコ民族主義者の多くはスペイン統治に反発を見せるようになった。民族主義者たちはこの頃から都市部だけでなく部族地域も含めたモロッコ保護領の多くの地ではっきりとモロッコ民族主義の旗を掲げるようになった。彼らはいくつかの地域で集会を開き、自治要求を強めた。これらの民族主義者たちは部族地域にも出かけて行き、「原住民」の支持を獲得しようとしたが、部族地域ではスペイン植民地当局の監視が厳しく、「原住民」の明確な支持派は得られなかった。スペイン植民地当局は民族主義者の動向を監視し、あらためて民族主義の分裂を図る政策を採った。
（4）1943 年頃まではモロッコ民族主義者と連合軍・連合国との関係は明確には見られない。1944 年以降になると、双方の接触が確認される。モロッコ民族主義者の一部には、連合軍・連合国に協力して、スペイン植民地当局またフランス植民地当局に対する自治要求を強めようとの動きが現れた。他方、連合軍・連合国はフランス植民地当局と対決しようとはせず、またフランコ政権のモロッコ統治に対しても強い姿勢で臨んでいない。
（5）フランコ政権は、1944 年以降には、連合軍・連合国に対してとくにフランス領での「原住民」統治との差異（フランス領では民族主義者への抑圧、スペイン領では民族主義者への宥和政策）を強調し始め、連合国の歓心を買おうとした。しかし、連合軍の北アフリカ作戦の展開、さらには連合軍がフランス本土をドイツから奪回し、後に枢軸国とくにドイツが敗北すると、スペイン西北アフリカ帝国の夢は決定的に打ち砕かれることになった。
（6）第 2 次世界大戦後も生き延びたフランコ政権は旧連合国主導のスペイン「排斥」政策を受けて、むしろ、あるいはやはり対アラブ・マグレブ友好政策を打ち出さざるをえなくなる。第 2 次世界大戦後のフランコ政権の少なくとも公的にはモロッコ民族主義に妥協的な政策は、フランス領の民族主義運動と連携したスペイン領の民族主義者の要求を受けて、結局はモロッコ独立容認に至ることになる。
（7）アフリカ植民地とくにモロッコ確保のための戦争で自らを確立してきたスペイン軍アフリカ派は、第 2 次世界大戦末期とその後の地域的・世界的条件の中で、西北アフリカ帝国建設の夢を自らの手で放棄せざるをえなくなった。それはフランコ政権の中でもはや軍アフリカ派が再生産されなくなったこと、さらにはフランコ政権内部での軍部の後退をも意味した。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 7 件）

① 中田潤「ドイツ連邦共和国における戦後システムと歴史認識　自由主義コンセンサスとポストフォーディズム」、『戦後システムの転形　年報日本現代史』20 号、163-199 ページ、2015 年、査読有
② 中田潤「ドイツ連邦共和国における戦後システムと歴史認識　自由主義コンセンサスとポストフォーディズム」、『占領・戦後史研究会ニューズレター』35 号、5-8

ページ、2015 年、査読有

③ 中田潤「新しい社会運動における価値保守主義　H.グルールとB.シュプリングマンを題材に」、『社会科学論集』(茨城大学人文学部) 59 号、35-56 ページ、2015 年、査読無

④ 深澤安博「スペイン第 2 共和政と植民地モロッコ（下)」、『人文コミュニケーション学科論集』(茨城大学人文学部) 17 号、51-75 ページ、2014 年、査読無

⑤ 深澤安博「スペイン第 2 共和政と植民地モロッコ（上)」、『人文コミュニケーション学科論集』16 号、45-64 ページ、2014 年、査読無

⑥ 深澤安博「スペイン内戦における空爆――植民地戦争から内戦へ／総力戦の様相と毒ガス戦の準備／爆撃の証言」、『戦争責任研究』82 号、46-55 ページ、2014 年、査読無

⑦ Yasuhiro FUKASAWA, ‘El Marruecos español y el ‘pacifismo’ de la Segunda República española’, *Actas del II Congreso Ibero-asiático de Hispanistas*, 号数無、pp.587-600, 2014, 査読有

〔学会発表〕（計 3　件）

① 中田潤「新しい社会運動における保守的環境主義（者）　ドイツ戦後史研究におけるメタヒストリーの枠組みを視野に」、現代史研究会 2014 年 7 月例会、2014 年 7 月 19 日、一橋大学

② 中田潤「ドイツ連邦共和国における戦後システムと歴史認識　自由主義コンセンサスとポストフォーディズム」、2014 年度占領・戦後史研究会シンポジウム、2014 年 12 月 13 日、二松学舎大学

③ Yasuhiro FUKASAWA, ‘El Marruecos español y el ‘pacifismo’ de la Segunda República española’, II Congreso Ibero-asiático de Hispanistas, 2013 年 9 月 22 日、京都外国語大学

〔図書〕（計 3 件）

① Angel VIÑAS, Yasuhiro FUKASAWA et al., Universidad de Salamanca, *Bibliografía en torno a la guerra civil española*, 2016,　ページ数未確定

② 深澤安博　論創社、『アブドゥルカリームの恐怖　リーフ戦争とスペイン政治・社会の動揺』、2015 年、481 ページ

③ Michael JONAS, Jun NAKATA, et al., Paderborn, *Dynamiken der Gewalt.Krieg im Spannungsfeld von Politik, Ideologie und Gesellschaft*, 2015, 407 p.

〔産業財産権〕
無し

〔その他〕
無し

６．研究組織

(1)研究代表者
深澤　安博（FUKASAWA YASUHIRO）
茨城大学・人文学部・名誉教授
研究者番号：60136893

(2)研究分担者
中田　潤（NAKATA JUN）
茨城大学・人文学部・教授
研究者番号： 40332548

(3)連携研究者
無し